

# ファミレスにて

ヨコテ

曇天の空を、松原亜沙美は恨めしそうに見上げた。天気予報では快晴のはずだったのに、今にも降り出しそうで少し肌寒い。デートを中断せざるを得なくなり、楽しいひとときを邪魔されたとの思いもあった。

腕時計を見る。

五時四十分。

六時の待ち合わせにはまだ早い。亜沙美は鶴川浩一の家玄関を出たところだった。

「やっぱり車で送ろうか？」

恋人の鶴川も空を見上げて不安そうに言う、しかし、鶴川の不安は別なところにあった。

「ううん、いいの。そんなに遠くないし、本屋にも寄りたいから。いつも買ってる雑誌の発売日なのよ。それに……ふたりでいるところを見られるかもしれないじゃない」

「それはそうなんだけど……」

鶴川は尚も懸念を抱くような顔をしていた。

話したいことがあると、亜沙美は会社の元・同僚である上村真佐子に突然呼び出された。休日の土曜日、デートの途中だったが、断れば変に怪しまれると思い、承諾した。

真佐子は、今のところはまだ鶴川の妻だった。

待ち合わせは場所は鶴川の家近くにあるファミレス。わざわざあのファミレスを選んだことに何か思惑があるんじゃないか、と鶴川は言ったが、亜沙美は、考え過ぎよ、と笑い飛ばした。

「心配しないで。話というのは、いつものあなたへの愚痴に決まっているわ」

「そうだといいいんだが……。時期が来たら真佐子には俺からきちんと話すつもりだけど、何しろあいつは情緒不安定なところがあるだろう、ふたりの関係に気づいたら何をしでかすか……」

「大丈夫よ。何かあってもファミレスには他の人もいるし……。それに、気づかれているはずがないわよ」

玄関で見送る鶴川に、それじゃ、行ってくるね、と亜沙美は大きく手を振った。

国道への小道を少し歩いたところで振り返る。こぢんまりとした鶴川の家が見える。鶴川が大決心して買った三十年ローンの、建ってまだ一年の新しい家——やがてここに自分は住むことになると思うと、亜沙美の顔は自然と綻んだ。小道を曲がり、ファミレスへと続く国道の歩道を歩いていると、学校帰りの賑やかな中学生の団体と擦れ違った。部活の帰りだろう、屈託がなく、それぞれにスポーツバッグを提げている。

あの頃の亜沙美は、こんな恋愛をすることは夢にも思わなかった。誰もが祝福してくれるような、そんな恋愛をするものとはばかり思っていた。

略奪愛——鶴川との恋愛は、意図したことではなかったが、結果的にはそうってしまった。少なくとも、世間の目にはそう映るだろう。

亜沙美と鶴川は課こそ違うが、同じ会社に勤めている。鶴川が企画開発課、亜沙美は総務課。真佐子も寿退社する一年前までは亜沙美と総務課でデスクを並べていた。亜沙美が新入社員だった頃、いろいろと教えてくれ、いわば教育係のような立場だったのが四つ上の真佐子だった。キャリアウーマン然としていて、テキパキと仕事をこなす真佐子を亜沙美は憧れ、尊敬した。隣同士のデスクということもあり、ふたりはすぐに親密になった。やがてプライベートに関してもいろいろな相談をするようになり、ふたりの信頼関係は揺るぎないものになった。そんなとき、真佐子が嬉しい報告をしてきた。真佐子が結婚すると聞き、亜沙美は心から祝福した。だが、相手の名前を聞いて祝福は驚愕に変わった。鶴川浩一——入社以来、密かに恋い焦がれていた名前だった。真佐子は得意満面の顔で、好きな人がいるって言ってたけど、あなたもその人と結婚できたらいいわね、と言った。亜沙美は鶴川への思いを吹っ切ろうとして一晩中泣いた。

ところが、ふたりの結婚生活は一年を待たずして破綻を来した。真佐子は異常に嫉妬深いところがあり、何かにつけて鶴川の浮気を疑った。しまいには鶴川にヒステリックな暴力まで振るうようになった。

何とかしなければと思った鶴川が真佐子と仲のよかった亜沙美にアドバイスを求め、それがふたりの交際の切っ掛けとなった。真佐子からも相談を受け、鶴川への愚痴を聞かされていた亜沙美は板挟みになった。公平に話を聞くように努めたつもりだったが、それが出来たと胸を張って言える自身はなかった。誰だって自分が一番可愛い。

鶴川と真佐子は離婚調停中だった。鶴川の方から、婚姻関係の継続は困難と申し立てた。そんな最中、亜沙美と鶴川が恋愛関係にあるのはどうしても秘匿しなければならなかった。調停が不利に働いてしまうと、また、自分の存在がふたりの離婚の原因になったと邪推されるのも、亜沙美は嫌だった。確かに、離婚調停とふたりの関係は同時進行しているが、鶴川が真佐子との離婚を決意し、そのあと鶴川との関係が始まったのであって、自分と鶴川の関係は浮気や不倫ではないとの自負があった。ただ手続きが終わっていないだけ——亜沙美は確固としてそう思っている

途中の本屋で発売されたばかりの雑誌を買い、時間を調節して、亜沙美は六時二分前に真佐子が指定したファミレスに着いた。ドアを開け、中の様子をうかがう。夕食時だったが、店はそれほど混んでおらず、真佐子もまだ来ていなかった。

「一名様ですか？」と、ウェイトレスがにこやかな顔で訊く。

「いいえ、あとでもうひとり来ます」

「二名様ですね。こちらへどうぞ」

案内されるまま窓側のテーブルにつく。

「お決まりになりましたらお呼びください」と言い、ウェイトレスはお辞儀をして去っていった

店内の美味しそうな匂いに、亜沙美はお腹が減っていたのを思い出した。しかし、ここで食事をするつもりはなかった。真佐子の愚痴を聞いたあとは鶴川の家で夕食をすることになっている。

そのための材料を鶴川とふたりで近くのスーパーに行き、買って来たばかりだった。献立は寄せ鍋。鶴川がカートを押し、亜沙美は新婚気分で食材を選んだ。椎茸は苦手なんだ、と小さな不満を言う鶴川を、好き嫌いは駄目よ、と諫めた。子供のように拗ねる鶴川が可笑しかった。本当はもう少し手の込んだものを作ってあげたかったのだが、真佐子と突然会うことになり、それは出来なくなってしまった――。

今度の参考にしようとメニューを眺める。肉料理が好きな鶴川のために、ハンバーグにしようかと思う。ハンバーグなら得意料理の一つだし、喜んで食べてくれるだろう。

メニューをパラパラとめくりながら、亜沙美はすでに何度か立ったことのある鶴川の家の台所を思い浮かべた。調理器具や食器などを置いてある場所は殆ど把握している。今日は寄せ鍋。土鍋も卓上コンロも確か、食器棚の一番下に仕舞ってあった。買い忘れた食材はないだろうか。白菜は買ったし鶏肉も買った。お豆腐も買ったし、あとは……

そんなことを考えていたらウェイトレスと目が合ってしまった。

「お決まりでしょうか？」

オーダー入力の端末を持ち、ウェイトレスが笑顔で注文を訊く。

「ええと……コーヒーでいいわ」

何にするか、何も考えていなかった亜沙美は、慌てて答えた。

「コーヒー一つですね、かしこまりました」

ウェイトレスの後ろ姿から再びメニューに視線を移し、ただ漫然と眺める。食事を作り、掃除して洗濯して、帰ってくる夫を今か今かと待つ――鶴川の家で毎日を過ごしている、自分の将来を想像するのは愉しかった。それは遠くない未来の話――。離婚調停が済めば新しい生活が始まる。

ふと窓の外に目をやると、自転車に乗った買い物帰りのおばさんが通り過ぎていった。家路を急ぐ親子連れもいた。女子高生がお喋りに興じながら、口を大きく開けて笑っている。若いお母さんがベビーカーを押している。何処にでもあるありふれた平和な光景。亜沙美は、この街の一部になっている自分を思い描いた。そこには自分も違和感なく融け込めるはずだ、と思った。

そんな日常的な平和を破る音がした。

遠くから緊急を告げるサイレンの音が聞こえてくる。

国道を次第に近づいて来ており、亜沙美はサイレンの音のする方へ顔を向けた。消防車だった。何処か近くで火事があったようだ。けたたましくなるサイレンの音を残し、消防車はファミレスの前をあっという間に過ぎていった。

ウェイトレスがコーヒーを持ってきた。

「火事があったみたいですね」

「そうですね。……ではごゆっくり」

運ばれてきたコーヒーを一口啜り、腕時計に目をやる。

六時十分。

約束の時間から十分も過ぎている。

亜沙美はファミレスの出入り口を見た。急いで真佐子が駆け込んでくるかもしれないと思ったが、そんな様子はなかった。真佐子が時間に遅れるのは珍しかった。一分の遅刻も社会人には赦されないのよ、と厳しく指導されたことを思い出し、何かあったのだろうかと少し不安になる。自分から呼び出しておいて遅れるというのも、礼儀にうるさい真佐子には考えられないことだった。

時間潰しに、買ったばかりの雑誌をバッグから取り出す。

“彼との夏休みはここで過ごそう”と、海外旅行の特集をしていた。

当然、亜沙美は鶴川を念頭に置いて雑誌を眺めた。イタリアやフランス、スイスなど、ヨーロッパの片田舎の風景写真が載っていて、聞いたこともない地名ばかりだったが、写っている教会は亜沙美の胸を高鳴らせた。小さいながらも歴史の重みを感じられ、凜としている。こんなところで結婚式を挙げられたなら最高だろうな、と思う。

今年の夏にヨーロッパを旅行するのは無理だろう。ましてや、結婚式はまだまだ先の話だ。だけど、今年の夏は近場でいいからふたりきりの旅行がしたいな――。

それを提案したときの、驚きながらも嬉しそうにする鶴川の反応を想像し、亜沙美はひとり悦に入った。

さらに雑誌をめくる。

お決まりのメイクやダイエットのページはおざなりに読み進んだ。芸能記事は飛ばした。そして腕時計に目をやり、溜め息を吐いた。

二十分が過ぎている。

出入り口に目を向けるが、やはり真佐子は来そうになかった。

携帯電話を取り出し、真佐子の番号を押す。

呼び出し音が鳴る。

しかし真佐子は出なかった。

留守番電話に「亜沙美です。もう少し遅れるようなら電話をください」とメッセージを残す。

何かあったにしても、連絡しないなんて――と、亜沙美は不安よりも真佐子への苛立ちが大きくなった。あと十分待って、それでも来ないようなら帰ろうと思った。もともと呼び出したのは向こうの方だ、いくらお世話になった先輩とはいえ、それ以上待つ義務はない。

空いていた隣のテーブルに、三人の親子連れが座った。お母さんと女の子と男の子。女の子がお姉ちゃんで、六、七歳。男の子は四、五歳といったところだろう。席に着くなり、男の子は持っていたパトカーのおもちゃをテーブルに置いた遊び始めた。お母さんは「静かにしなさい」と男の子を叱りつつ、メニューを見ている。何があったのか、女の子は機嫌が悪そうだった。

所在なげに、亜沙美はコーヒーに手を伸ばした。

コーヒーはすっかり冷めていて美味しくなかった。

隣の注文を聞き終わったウェイトレスが「お代わりをお持ちしましょうか？」と訊いた。亜沙美は断った。多分、あと十分もすればここを出て行くことになる。

読み掛けの雑誌に目を戻す。

“実際にあった浮気の精算”の見出しが目に飛び込んできた。

妻が夫を刺し殺した話。逆上した夫が妻を絞殺した話。夫と不倫相手が共謀して妻を車で轢き殺した話。どれもこれもおぞましい話で、いつもの亜沙美だったなら読み飛ばしていただろう。しかし、今の亜沙美には切実に思え、読まずにはいられなかった。

不倫相手——鶴川と真佐子が正式に離婚していない以上、自分と鶴川との関係は不倫となってしまうのだろうか。そう見られることが亜沙美は嫌で堪らなかった。

鶴川の真佐子への愛情はとっくに冷めていて、そのあと鶴川と自分の関係が始まったのだから不倫などではないはずだ。世間的にはそうなるのかもしれないが、自分に疚しいところは何もない。

「何を読んでいるの？」

不意に、からかうようにして覗き込む顔があった。

真佐子だった。



まさに不倫の記事を読んでいた亜沙美は死ぬほど驚いた。

「遅れてごめんね。いろいろあって……」

真佐子が笑いながら言い訳をするのを尻目に、亜沙美は雑誌を仕舞った。

「別にいいけど……連絡くらいしてくれてもよかったんじゃない」

「急いで来ちゃったから携帯を忘れたのよ」

道理で携帯に出ないはずだ。あっけらかんとしている真佐子に、亜沙美は微かな怒りを覚えた

。

「そう」とひと言、醒めた口調で言い、メニューを差し出す。

「私は何も要らないわ。長居するつもりはないから」

遅れてきておいて長居するつもりはないとは、何という言い草だろう。

こんなにも身勝手な女だったのかと、亜沙美は呆れた。

会社にいたときとは別人のように変わってしまった真佐子——その原因は鶴川との離婚問題にあるのだろうが、それも元を質せば真佐子の嫉妬深さに因るものだ、同情など出来ない。

「でも、何も頼まない訳には……」

「大丈夫よ、誰も気づいていないから。それにしても懐かしいわ。あの人と暮らしていた頃はここへよく来たものよ。あの人はあまり来なかったけど……。あなたが座っている席、そこが私の指定席だったの」

真佐子の指定席に自分が座っている——。

当て擦りを言われたようで、亜沙美は一抹の不安を覚えた。

「そう。それで話っているのは？」

真佐子との話を一刻も早く終わらせたくて先を急いだ。すぐにでも鶴川の家に戻りたかった。ふたりで鍋をつつき、今日は泊まるつもりでいる。そのために新しいパジャマを買った。

「会社のみんなは元気？」

話を急ぐ亜沙美のことなど何も気に掛けていないかのように、真佐子が暢気に訊く。

「ええ、元気よ」

真佐子は総務課のひとりひとりの様子を知りたがった。そんなことを訊くために呼び出したのではないと分かっていたが、亜沙美は最近の課の状況を話して聞かせた。

「ふうん」とか「へえ」とか言いながら、真佐子は亜沙美の話を聞いていたが、何処か上の空で、それほど関心があるようには思えなかった。それでも亜沙美は、時間が早く過ぎるのを祈りつつ、丁寧に話した。

「あの人は会社ではどうなの？ たまには顔を合わせることもあるんでしょ？」

やっと本題に入った。

これから本格的に愚痴が始まると思うと、亜沙美は少し声を潜めた。隣のテーブルが近い。

「滅多に会わないわよ。以前は話をしたこともあったけど……最近忙しいみたいよ」

「最近も？ そう。最近も忙しいんだ。あの人はいつも忙しそうにしていたわ。残業、残業、毎日残業。本当だったか怪しいものだわ。打ち合わせだとか接待だとか言ってけど、誰と会ってたんだか……」

会う度に聞かされる話——相変わらず浮気の疑惑が晴れないようだ。

鶴川が最近忙しいというのは嘘だったが、真佐子が会社を辞めた一年前から会社の業績は急激によくなり、鶴川のいる企画開発課で残業が続いたのは事実だった。鶴川に浮気をしている暇はなかった。そのことを何度も話して聞かせたのだが、真佐子は聞く耳を持ってくれなかった。

「もう少し鶴川さんを信用してあげてもいいんじゃないかしら。鶴川さんが可哀想だわ」

亜沙美の言葉に、真佐子の顔色が変わった。

「可哀想だなんて……あなたはどっちの味方なの？」

「わたしは……」

言い淀んでいると、視線を感じた。

隣のテーブル。

男の子が不思議そうな顔で亜沙美をじっと見ていた。

何か変なことを言っただろうか――。

亜沙美は隣の男の子が気になりつつも話を続けた。

「もちろん真佐子さんの味方よ」

「ほんと？ 嬉しいわ」

「でも、鶴川さんが浮気をしていなかったのは本当なんだと思うわ。それは信じてあげて」

「浮気をしていなかったですって？ 何を言ってるの。あの人は現に浮気をしているのよ」

亜沙美はドキリとした。現に、という言葉が自分を指しているように聞こえた。

「あなたは何も知らないの？」と、真佐子が意味ありげに訊く。

「何も……何も知らないわ」

強く否定したあと、亜沙美は自分の口調が不自然でなかったかどうか、気掛かりだった。ここで勘づかれてしまったら、今後の離婚調停に悪い影響を与えてしまう。

「ふうん、そうなの。何も知らないんだ……」

納得した様子の真佐子に、亜沙美は少しだけホッとした。

「知らないんなら教えてあげるけど……」

もったいつけるように言い、真佐子は上目遣いに亜沙美を見た。

教えてあげる？ 何を？

急に不安に苛まれ、亜沙美の鼓動は速くなった。

「あの人と同じ課の藤野沙織って知ってる？」

「顔だけは知ってるけど……」

企画開発課の藤野沙織といえば美人で評判だが、話をしたことはない。どうして彼女の名前が出てきたのだろう、と亜沙美は訝しく思った。

「藤野沙織が浮気相手なのよ。きっとそうだわ。私は彼女が嫌い。殺したいほど嫌いわ」

「殺したいだなんて言わないでよ、怖いじゃない。どうしてそう思ったの？ 誰かに訊いたの？」

本当にやりかねないと思い、亜沙美は真佐子を刺激しないよう、穏やかな声で言った。

それにしても濡れ衣を着せられた藤野沙織は気の毒だ。何の関係もないのに、真佐子に殺したいほど憎まれるなんて。それとも何か関係があるのだろうか。私の知らない鶴川がいるのだろうか。

「遼子さんから聞いたのよ」と、真佐子は答えた。

遼子は亜沙美と同じ総務課にいて、真佐子と親しくしていた。古株で社内の事情に通じている

。

「今でも連絡を取ってるんだ……」

遼子なら自分の知らない鶴川を知ってるかもしれないと思うと、亜沙美の胸中は激しく騒いだ

。

遼子から何を聞いたのだろう。亜沙美はその答えが早く知りたかった。

「遼子さんから何を……」と言い掛けたところで、再び男の子の視線を感じた。

隣のテーブルにはいつの間にか料理が運ばれていて、男の子がミートソースを食べながら、奇妙な生き物でも観察するようにこっちを見ている。

この子は人をじっと見る癖があるのだろう。子供のことだから気にしても仕方がない、と思うようにしたが、それでもやはり不愉快だった。

「何を聞いたの？」

男の子に注意を奪われている場合ではないと自分に言い聞かせ、亜沙美は真佐子に向き直った。

「遼子さんは見たって言うのよ」

「何を？」

「ふたりが社内で仲睦まじくしているところを」

同じ会社の人間だ、親しくすることはあるだろう。仲睦まじいかどうかは見る人の主観であり、それがどの程度のことだったのか、疑問だ。ましてや遼子は話を大きくする傾向がある。大きくなった話を真佐子が鵜呑みにしただけだろう。

「それくらいのことで……」と、亜沙美は薄く笑った。

「まだ続きがあるのよ」

真佐子が決然と畳み掛ける。

「遼子さんから聞いて私は彼の行動を監視したわ」

「監視したの？」

亜沙美は驚きの声を上げた。

「当然じゃない。私は妻なのよ。夫の行動は全て把握しておきたいわ。夫が何をして、何処で誰と会っているのか、知りたいと思うのは当たり前じゃない」

夫の全てを知りたいという気持ちは分からないでもないが、そのために監視をするというのはどう考えてもやり過ぎだ。亜沙美は真佐子の病的な資質の一端を垣間見た気がした。

「彼の普段の行動はだいたい分かったわ。もちろん会社の中には入れないから、それは遼子さんから聞いて、外での行動は私がこの目で見届けたわ」

外での行動を見ていた——。最近も忙しいという嘘はばれていたのだろうか。それなら嘘と知っていて何も言わなかったのはどうしてだろう。私の姿も見られたのだろうか。いや、真佐子が話しているのは藤野沙織のことだ、私のことじゃない。

「監視していて……私も見たわ。彼と藤野沙織と一緒にいるところを。ふたりは映画を観て、食事して、そのあとホテルに入っていったわ」

鶴川と藤野沙織がホテル——考えられない。そんなことは絶対に有り得ない。大方、浮気の疑心に凝り固まっている真佐子が誰かと見間違えたに決まっている。

「本当に鶴川さんと藤野さんだったの？」

亜沙美が訊くと、真佐子は再び顔色を変えた。

「何よ。私の妄想だとでも言いたいのか」

「そうじゃないわ。ただ本当かなって思っただけよ」

慌てて言い繕う。しかし、真佐子の興奮は治まらなかった。

「本当のことよ。ふたりは腕を組んでホテルに入っていったわ」

「でも……見間違いの可能性もあるんじゃない？　きっとそうよ。藤野さんが彼氏と会っていたのよ。その彼氏を鶴川さんと見間違えたのよ」

「そんな訳がないわ。私は鶴川を監視していたのよ。会社から出てきた鶴川を見つけ、その先で藤野さんを見掛けたの。藤野さんを見間違えることはあっても、夫の鶴川を見間違えることはないわ」

そうだった。真佐子はずっと鶴川を監視していたんだった。

すると、本当に鶴川は藤野沙織と会っていたのだろうか——。

亜沙美はハッとなった。

真佐子が見たという藤野沙織は自分だったのではないか。自分と沙織を見間違えたのではないか。映画を観て食事、そしてホテル。そんなデートを何度かしたことがある。

「あなたの言うとおりに、見間違いかもしれないわね……」と、真佐子が前言を翻した。

「そうよ。見間違いだったのよ」

勇んで言う亜沙美に対し、真佐子は冷静そのものだった。

「私の勘違いで殺されたんじゃ藤野さんも浮かばれないだろうから……それを確かめなきゃね。わたし、藤野さんに会ってみようと思うの。会えばハッキリするはずよね。ねえ、どう思う？」

「どう思うって言われても……」

藤野沙織への疑念が晴れたら、真佐子は次の標的を探すだろう。それは私だ。真佐子は疑いの目を私に向けてくるに違いない。会わせてはならない。

「会ったところで無駄よ。藤野さんが正直に話すかどうか分からないじゃない」

「無駄かしら。私はそうは思わないけど。亜沙美さん、あなた……私の味方だっていつてくれたわよね？」

「そうよ」

「さっきから話を聞いていると、どうも鶴川の肩を持っていると思えてならないんだけど……」

真佐子が疑いの目を向ける。

「そんなことないわよ」

亜沙美は激しく動揺した。やはり真佐子は自分と鶴川の関係に気づいているのかもしれない。思わず目が泳いだ。

その目にまたしても隣のテーブルの男の子が映った。

じっとこっちを見ている。

男の子が口を開いた。

「ママ。この女の人、変だよ」

母親が「黙ってなさい」と慌てて叱る。

女の子は気味の悪いものを見る目で亜沙美を一瞥し、そっぽを向いた。

亜沙美は腹が立った。男の子の傍若無人な態度にも腹が立ったが、それ以上に、子供の非礼を詫びようともしない母親に腹が立った。

私の変？ 本当に失礼な親子だ。

隣の親子に苛つかされながらも、亜沙美は真佐子との話に意識を集中しようとした。自分に向けられつつある疑惑を何とか払拭しなければなど、それだけを考えるように努めた。

「鶴川が浮気をしないようなことを言ってたけど……彼のことをよく知っているようね」

探るように真佐子が言う。

「よく知っている訳じゃないわ。何度か話をしていてそう思っただけよ。ただの直感よ」

「そう。それならいいんだけど」

意味ありげな笑みを浮かべ、真佐子は大きく息を吐いた。

「本当のことを言うと……私が藤野さんを見たって言うのは嘘なの。遼子さんから話を聞いたって言うのも嘘。会社を辞めてから会ったことも話をしたこともないわ」

嘘だった——。

胸中を覆っていた暗い闇が晴れるのを亜沙美は感じた。

真佐子は何も見ておらず、作り話をしていた。



全ては真佐子の妄想——デートの現場を見たというのも嘘だったのだろう。

だが、それは違った。

「私はね、あのとき見たのは藤野沙織じゃなくて、あなただったんじゃないかって思ってるの」  
真佐子に核心を突かれ、亜沙美は焦った。

「私？ 私のはずがないじゃないの」

動揺を悟られないよう、軽く笑ってみせる。しかし、顔は強張っていて上手く笑えなかった。

「正直に答えていいのよ、殺したいなんて言わないから。あなたが鶴川の浮気相手なんでしょ？」

真佐子がことさら寛容の表情をしてみせる。

正直になんて言える訳がなかった。

鶴川に迷惑を掛けてしまうし、真佐子がこのまま引き下がるとも思えなかった。まさか殺したりはしないだろうが——。

「私は正直よ。疚しいことなんて何もないわ。信じて、お願いだから」

亜沙美は必死に訴えた。

雅美は冷たく応えた。

「残念ね、赦してあげてもよかったのに……。誰かそれらしい人の名前を出せば、良心の呵責に耐えかねて自分の罪を告白してくれるんじゃないかって期待したんだけど、あなたは自分を護ることしか考えなかったわね。自分さえよければそれでいい、そうなんでしょ？ あのとき、あなたと鶴川がホテルに入っていくのを見た私が、どんな気持ちだったか分かる？ 夫の浮気相手がよりによってあなたただだなんて、信じられなかったわ。今日だってそうよ。鶴川とあなたがスーパーで仲良く買い物をして、そのあと彼の家に入っていったのを見たわ。まるで新婚さんだった。

あなたは私と会うために外へ出て、嬉しそうに鶴川の家を眺めていた。あの家にこのあと戻らなつてもいいんでしょ？　そして新妻になった気分ですりをするんでしょ？　あの材料からして多分鍋ね、違う？　赦してあげてもよかったのよ、本当に。あなたと私は親友だから。でも、あなたが全てを台無しにしたのよ」

嫌みに満ちた冷たい笑みで真佐子が話を続ける。

「一年もいなかったけど、あの家には愛着があったわ。だって彼が私のために買ってくれたんですもの。ふたりの愛の巣だったのよ。楽しい生活だった。だからあの家も彼も絶対に手放したくなかった。誰にも渡したくなかった。でも、私はあの家から追い出された。自分が異常に嫉妬深いのは分かっていたわ。彼が浮気していないのも分かっていた。分かっていたけどどうしても口に出してしまったのよ。彼の心が私から離れるのが怖かったの。怖くて、ついろいろんなことを口走って、それが悪循環になってしまったの。彼の心はますます離れていったわ。そうなのは自分のせい。彼は何も悪くない。悪いのはみんな私。それは分かっていた。だけど……彼は本当に浮気をした。相手はあなただった。信じられなかった。私は二重に裏切られたのよ」

「浮気じゃないのよ、誤解しないで。私はそんなつもりじゃ……」

亜沙美は言うのをやめた。真佐子の憎しみに満ちた目にはどんな言い訳を並べ立てても無駄な気がした。

「もう遅いわ。親友だと思っていたから、非を認めて謝ってくれたら、あなただけは赦してあげてもよかったのに。だけどあなたは本当のことを言ってくれなかった。赦さないわよ」

「赦さないって……どうするの？」

亜沙美の問い掛けに、真佐子は薄笑いを浮かべるだけで何も応えなかった。

亜沙美は怖くて堪らなかった。これから真佐子の報復が始まる。それは鶴川にも向けられるだろう。いや、それはすでに過去形なのかもしれない。

あなただけは赦してあげてもよかったのに——真佐子の言葉が頭をよぎる。

「鶴川さんは？ 彼に何をしたの？」

「言ったでしょ。あなたに奪われないようにしただけよ、彼もあの家も」

「彼をどうしたのよ？」

亜沙美の言葉には耳を貸さず、真佐子は腕時計に目をやった。

「七時になったわね」と、まるで関係ないことを言う。

「それがどうかしたの？」

訳が分からないでいると、真佐子はさらに妙なことを言った。

「あなたの携帯、テレビが観られるわよね？」

「観られるけど、それが……」

「いいから点けてみなさいよ」

不審に思いながらも、亜沙美はバッグから携帯を取りだし、テレビ画面を映した。

「七時のニュースをやってるでしょ、観れば分かるわ」

言われたとおりに、チャンネルをニュース番組に合わせる。

画面には紅蓮の炎を窓から吹き出している、一軒の家が映った。大勢の消防士が消火活動を行っている。ホースの先から水が勢いよく放たれている。場面が変わると〈LIVE〉の表示が入り、鎮火した家のところどころから白い煙が上がっていた。さっきの映像は出火直後だったようだ。火災の発見が早かったのか、窓や屋根は焦げていたが、家そのものは原形を留めていた。

「この家は鶴川さんの家……」

ついさっき、自分が出てきたばかりの家だ。

亜沙美は茫然として画面から目が離せなかった。

アナウンサーが事件の概要を伝える。

「本日の夕方六時頃、鶴川浩一さん宅で火事があり、鶴川さんとみられる男性の死体と身元不明の女性の死体が発見されました」

鶴川さんが死体で発見された——何てことだ！ 六時といえば、私が家を出てすぐだ。身元不明の女性って誰？ 藤野沙織？ そんなはずはない、彼女は関係ない。それじゃいったい——

アナウンサーの声は続いた。

「鶴川さんと女性の首に切り傷があったことから、警察では、無理心中、あるいは第三者による犯行の可能性もあるとみて捜査を進めています」

鶴川さんは殺されていた！

犯人はひとりしかいない。

「あなたがやったのね！」

声を張り上げ、亜沙美は画面に向けていた目を正面に戻した。しかし、目の前には椅子がポツンとあるだけで、真佐子の姿はなかった。キョロキョロと辺りを探す。

すると、大声を上げた亜沙美に、店内にいた誰もが好奇の視線を向けていた。

ひとりの男が近づいてくる。

「マネージャーの塚本と申します。失礼ですがお客様、他のお客様のご迷惑になりますので、もう少し静かにしていただけないでしょうか」

「済みません。ですが……前に座っていた友人が突然いなくなってしまったんです。殺人犯かもしれないんです、早く捕まえないと」

気が焦り、亜沙美は早口でまくし立てた。

「殺人犯？ それは大変だ、すぐに表を探します」

マネージャーは出入り口に向かいかけたが、隣のテーブルの、男の子の言葉で立ち止まった。

「誰もいなかったよ」

腰を落としてマネージャーは男の子に話を訊いた。

「本当に誰もいなかったの？」

「本当だよ。僕、ずっと見てたもん。この女の人、ひとりでお喋りしていたよ」

「何を言うの。この子、どうかしてるわ」

亜沙美は男の子を憎々しげに見やり、言った。

傍若無人なだけでなく、この子は虚言癖もあるらしい。

「本当ですか？ お母さん」

マネージャーの塚本が男の子の母親に向かって話し掛ける。

「ええ」と母親は頷いた。

関わり合いになりたくないようで、帰り支度を始めている。

亜沙美は腹立たしくて仕方がなかった。

「あなただって見たはずよ。ここにもうひとり座っていたじゃない。どうして嘘を吐くの？」

母親は亜沙美を無視して子供たちに帰り支度を急がせた。

店内がざわめきだし、立ち上がって亜沙美を見ている客もいた。

「こちらのお客様は見ていないということですが、本当にお連れの方はいらしたんですか？ お客様はおひとりだったんじゃないですか？」

「そんなはずはないわ。目の前にいて話をしたのよ。……ウェイトレスさん、そう、あのウェイトレスさんなら見たかもしれないわ」

亜沙美がウェイトレスを指さすと、マネージャーは手招きをして呼んだ。

「このお客様はもうひとり、お連れの方がこのテーブルにいたと仰るんですが……」

ウェイトレスは小さく首を捻った。

「いいえ。もうひとりいらっしゃるという話でしたが、結局お見えになりませんでした」

「嘘よ！ どうしてみんなで嘘を吐くの？ 殺人犯が逃げたのよ！」

亜沙美は絶叫してウェイトレスとマネージャーを睨み付けた。

「とにかく落ち着いてください」とマネージャーが宥める。

尚も、みんなが嘘を吐いている、と言い張る亜沙美に、マネージャーもウェイトレスも困惑しきりだった。店内の異常を察し、厨房からも調理人たちが顔を覗かせる。

そこへふたりの屈強な男が現れた。ふたりは刑事だった。

「あなたが松原亜沙美さんですね？」

「ええ、そうですが、何か？ あっ、鶴川さんの事件ですね。ちょうどよかった。犯人が逃げたんです、ここから。犯人は上村真佐子です、間違いありません。さっきまでいたんですけど、ここにいる人は誰も信じてくれなくて……」

鬼気迫る顔で亜沙美は言った。刑事なら自分の話を信じてくれると思った。しかし、刑事は怪訝そうな顔をするだけだった。

「本当にそんな人がいたんですか」と、刑事がマネージャーに訊く。

マネージャーは首を振った。

「上村真佐子さんならよく存じ上げています。いつもその席に座っておいででした」

マネージャーが亜沙美の座る席を目で示す。

「いらしたのなら我々が気づかないはずがありません」

「誰もいなかったんですね」と、刑事が念を押す。

マネージャーもウェイトレスも頷き、亜沙美だけが不服の顔をしていた。

「松原さんは上村真佐子さんがここにいたと仰いますが、それはあり得ませんよ。何故なら……死んだ女性の身元が上村真佐子さんと判明したんですから」

「そんな馬鹿な。私は確かに真佐子さんと話をしていたわ。それじゃ、あれは誰だったの？」

まさか——亜沙美の全身を怖気が走った。

「あなたが誰と話をしていたのか知りませんが、松原さん、我々は通報があってここへ駆けつけたんですよ。通報は匿名の女性からでして、同じ会社に勤めていたから事情をよく知っているとのことでした。その方の話によると、あなたは殺された鶴川さんと不倫関係にあって、なかなか離婚に応じない上村真佐子さんを恨んでいたとか。鶴川さんのことも恨んでいたそうですね、上村さんとよりを戻すかもしれないと思って……」

「そんなの嘘です！ でたらめだわ！」

「嘘だと仰いますが……誰が嘘を吐いているのか、ここにいる皆さんはご存じですよ」

小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、刑事が言う。もうひとりの若い刑事が何かに気づき、テーブルの下にしゃがみ込んだ。

「こんなものが」

ハンカチに包んで、若い刑事が血のついた包丁を拾い上げた。

「こちらで使っているものでしょうか？」と、刑事は訊いた。

ごくありふれた包丁を一瞥すると、マネージャーは首を振った。

「うちのじゃありませんね」

刑事は亜沙美を見据えた。

「どうやら誰かを刺したばかりのようですが、どうしてこんなものがあなたの足元に落ちているんです？ 説明してもらえませんか？」

亜沙美は蒼白になった。鶴川の家で何度か使ったことがあり、見覚えのある包丁だった。指紋も残っていることだろう。

「何かご存じのようですね。署までご同行願えますか」

ふたりの刑事に抱えられ、亜沙美はファミレスを出た。

外はマスコミでごった返していた。多くのフラッシュが焚かれる。

刑事が亜沙美を護るようにしてパトカーに向かった。

「何て耳の早い連中だ」と年嵩の刑事が悪態を吐く。

「我々だって駆けつけてまだ数分しか経っていないのに……。何処からか漏れたにしても早すぎますね。匿名の電話はマスコミにもあったんじゃないでしょうか」

「そんなところだろうな。ずいぶんとご丁寧な通報者だな」

パトカーは国道を走り出し、やがて鶴川の家の前を通った。

いつの間にか雨が降り出していた。そぼ降る悲しい雨――



亜沙美はうつろな目で、雨に煙る鶴川の、黒く煤けた家を見やった。

このまま私は犯人にされてしまうのだろうか。

打ちひしがれていた亜沙美は、最後の気力を振り絞った。

そんなのはごめんだ、私は犯人じゃない、無実だ。

そう言おうと思い、口を開いた。

「刑事さん、私がやりました」

頭に思っていたこととは全く逆の言葉が口を衝いて出た。驚いて、慌てて言い直そうとするが、口は自分の意志とは関係なく、固く閉ざされたままだった。

「全ての犯人があんたみたいに、すぐに自白してくれたら警察は楽なんだけどね」と、刑事が笑って言う。

亜沙美は観念した。真佐子はどうしても私を犯人にしたいようだ。

パトカーは照明の灯る国道を静かに走り続けた。

テールランプの赤い光が雨の中に筋となって残った。